

令和4年度川口賞報告書

報告者：吉村 太郎（東京大学総合研究博物館・大学院理学系研究科）

参加学会：World Congress of Malacology 2022

開催場所：Munich, Germany

日程：2022年8月1-5日

発表数：口頭発表 211 件, ポスター発表 106 件

## 参加報告

1962年から3年に一度開催される国際軟体動物学会 World Congress of Malacology は、本年コロナ禍でのドイツ・ミュンヘン現地開催となり、世界40カ国から320名以上の参加者が集まったものの、アジアからの参加者は非常に少ないものでした(全発表317件のうち日本からは10件)。国内外の感染状況や帰国時の検査証明、また海外渡航への自粛的な社会風潮がハードルとなる現況において、科学を志す者のみならず、日本の多くの若者が閉塞感を抱いていると思います。私は、この閉ざされた環境を打破したいという一心で渡航しました。このような思いで参加した先の学会において、とりわけ学際的共同研究の在り方について思いを致すところがありましたので、ここに書き留めたいと存じます。

WCM2022では、軟体動物の進化や生態、発生、分類、系統、古生物学、遺伝学、機能形態学、さらに保全といった多岐にわたるテーマの下で議論が行われましたが、いずれにおいても物理・化学領域の先端的分析手法を用いた研究が多くに関心を集めていました。例えば、ナノスケールの物理特性を定量分析する機能形態学的実証や SBF-SEM などを用いた生体組織の3次元微細構造観察、放射光蛍光 X 線による高精細な元素分析など、工学分野の得意とする手法を基礎生物学に取り入れ、既存の系統解析や細胞学的実験などと組み合わせる新たな視点から仮説を裏付けようとする学際的な試みが多数発表されていました。それらは、しばしば Nature 誌や Science 誌の掲載論文の研究でもありました。我が国の自然史研究にはあまり例を見ませんが、上述の研究例の多くは応用領域（特に材料学や農学など）の研究者との共同研究であり、多様な専門性を備えた研究グループにこそ成し得るイノベーションであると感じ入ります。かかる海外の研究グループと渡り合うためには、動物学の域を超えていかにコラボレーションを図り独自の視点を見出すか、そして、それによって他分野の研究者にとっても関心を抱かせる結果を導くかが問われていると考えます。

私の発表では、慶應義塾大学理工学部との共同研究により、基礎生物学的実験を基に、高精度のイメージング・元素分析・物理特性評価を加えて、深海の化学合成生態（口頭発表）および二枚貝の淡水進出史（ポスター発表）に焦点を当てた研究2件を扱いました。まだ粗削りな部分があると感じていますが、工学領域との学際的アプローチが評価され、光栄にも最優秀発表賞と「環境問題の解決に向けた基礎生物学の役割」というテーマの公募論文における表彰という名誉に与りました。今後の研究を見据え、身の引き締まる思いです。今一度、ひと夏の貴重な経験をお支えいただいた日本動物学会の関係各位に深謝申し上げます。